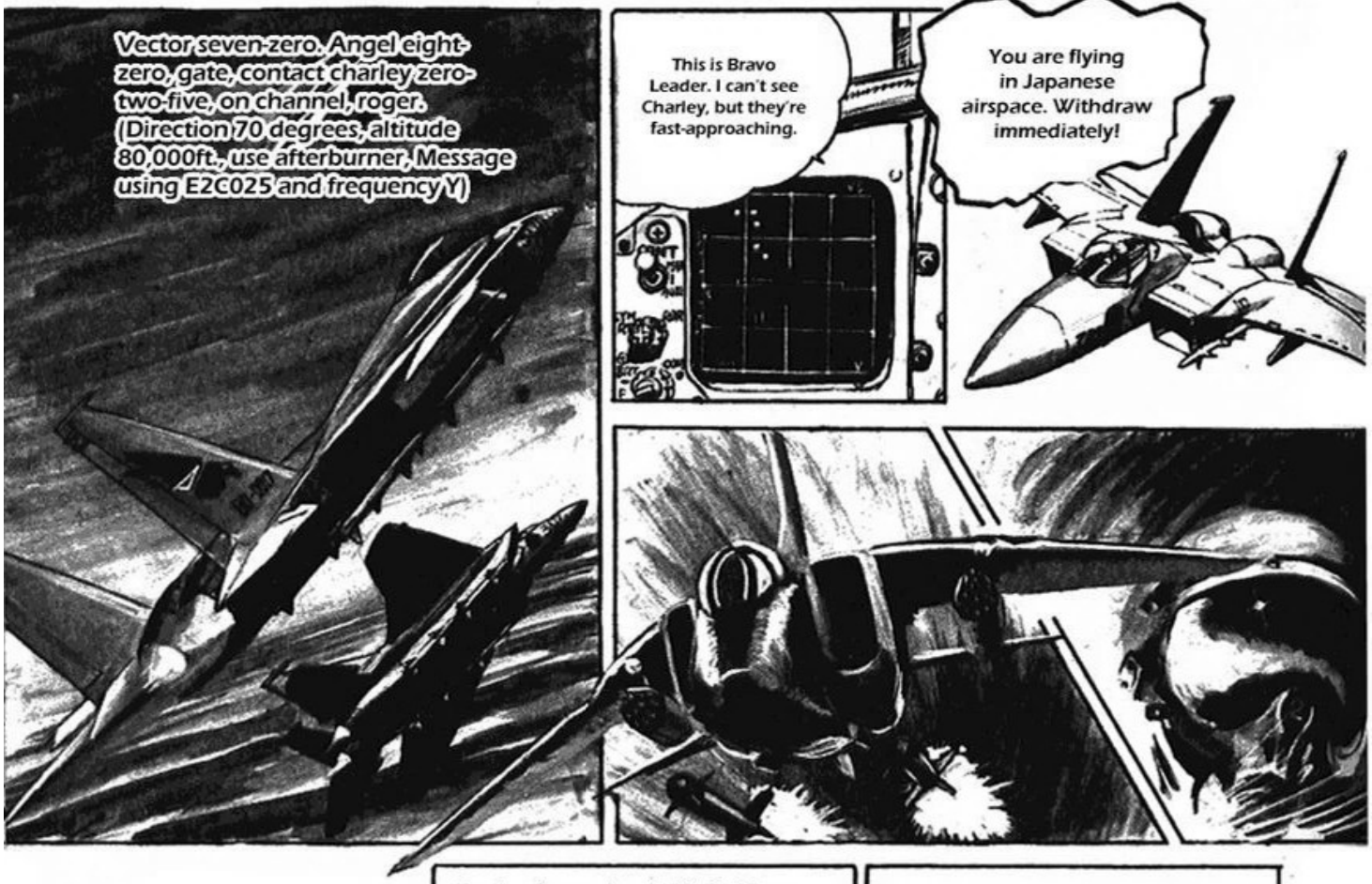
World War 3 in Japan
Soviet Invasion of Japan!
ソ連軍日本上陸！

The wheels were in motion before anyone realized it...
In Mar. 1979, Israel and Egypt signed a peace-treaty in Washington D.C. and outraged Arab oil-producers, led by Saudi Arabia, placed an oil embargo on U.S. and her allies. In response, the U.S. sent its 7th fleet to the Persian Gulf to forcibly secure oil fields. The U.S. 5th air force stationed in Japan also assisted with this operation, further spreading an ominous air throughout Asia. Meanwhile, tensions sparked again along the Sino-Vietnam borders, and the Soviets, who were pro-Vietnam and anti-China, decided to enlarge the war by invading China via the borders in Mongolia and Siberia. However, despite the growing world crisis, the Japanese public was far more concerned at facing its second oil shock since 1973. On Oct. 2 of 198X, the Chinese government requested Japan for naval assistance as part of the Peace and Friendship Treaty between China and Japan. And on Oct. 3, the Soviet government deemed the Japanese response to be hostile and thus forced Japanese diplomats to withdraw back to Japan.



The two F-15s called up as backup disappeared from the radar screen. Judging that the F-15s had been shot down, the control tower marked a black circle on the control panel, but the information was not able to be sent for the 28 radar sites stationed across Japan were soon wiped out. They had already been targeted vy various planes or cruise missiles from ships and submarines. Japan was now blind.

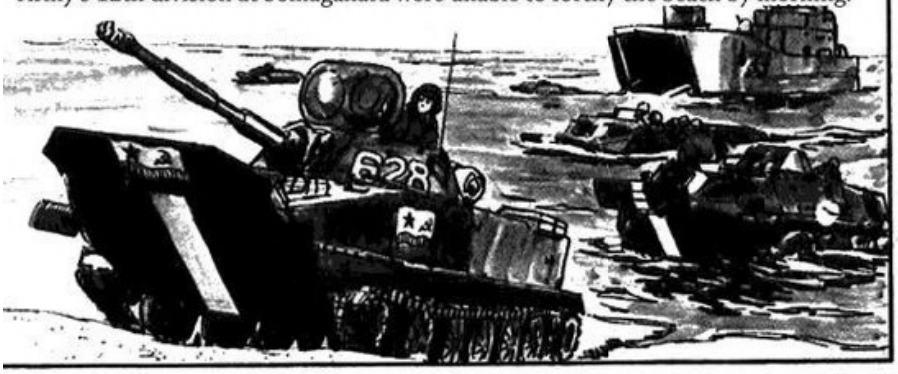
*BADGE = Base Air Defense Ground Environment

ソ連軍日本上陸！

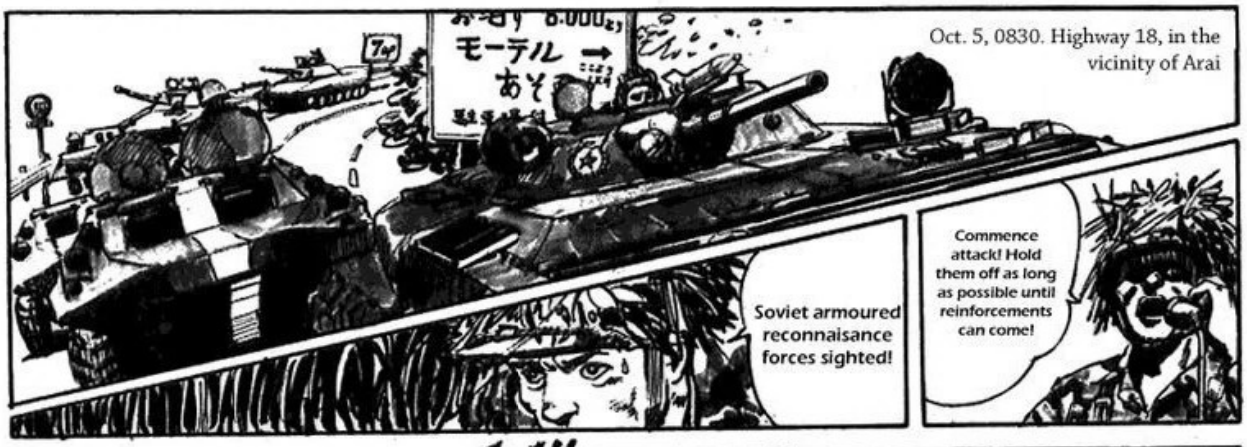
By midnight of Oct. 4, the Soviet Pacific Fleet had left the port at Vladivostok and now headed straight for the coast of Niigata. Included among the fleet was the Soviet aircraft carrier Kiev.

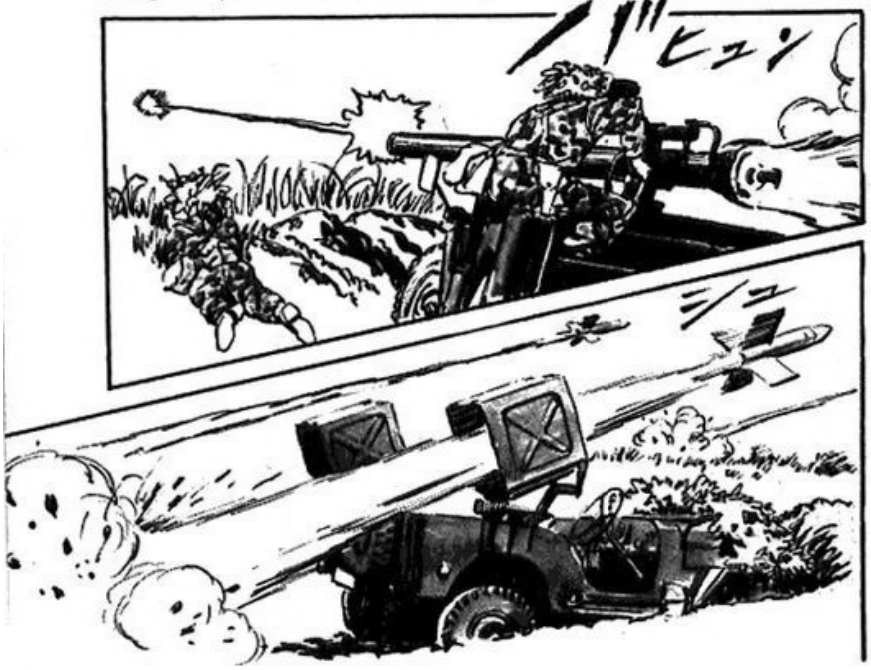
Oct. 5, 0130. JDS Makishio submarine, patrolling the area as a training mission detected the Soviet fleet's screws. By 0200, the coast had been alerted and Japanese citizens were immediately evacuated farther inland.

Within a single hour, Soviet forces stormed the coast of Naoetsu. The Eastern Army's 12th division at Somagahara were unable to fortify the beach by morning.



The two infantry regiments stationed in Niigata could hope to give no better resistance.

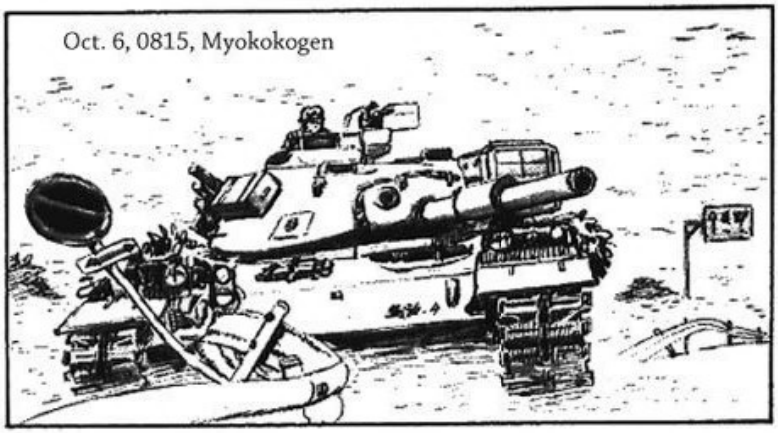


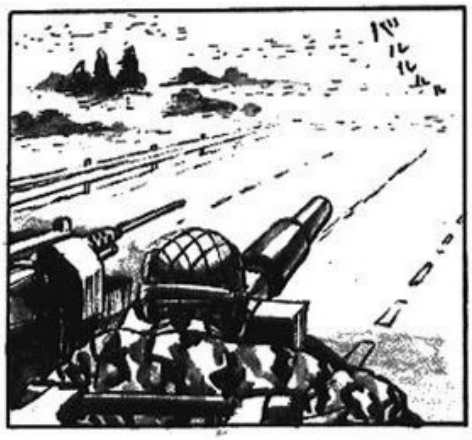


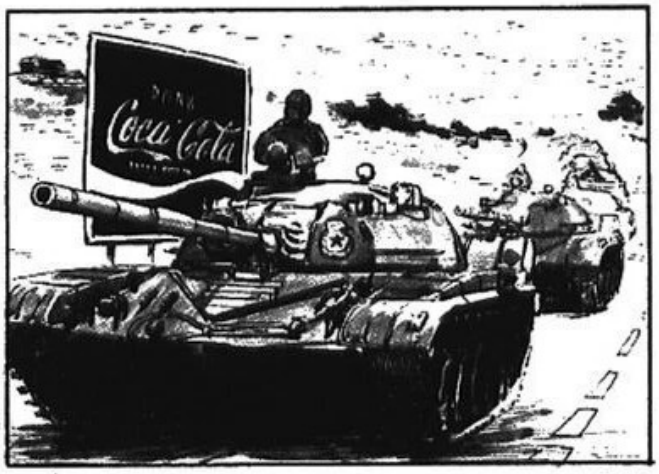
The 12th division fended off the Soviets with crossfire at Highway 18 and awaited Fuji school's armoured division and Narashino's 1st Airborne Brigade to reinforce them.

ソ連軍日本上陸！

By noon of that day, the defensive lines set up by the 12th division had all been penetrated and the Soviets had stopped 40km inland from the coast to resupply and prepare to push again tomorrow.

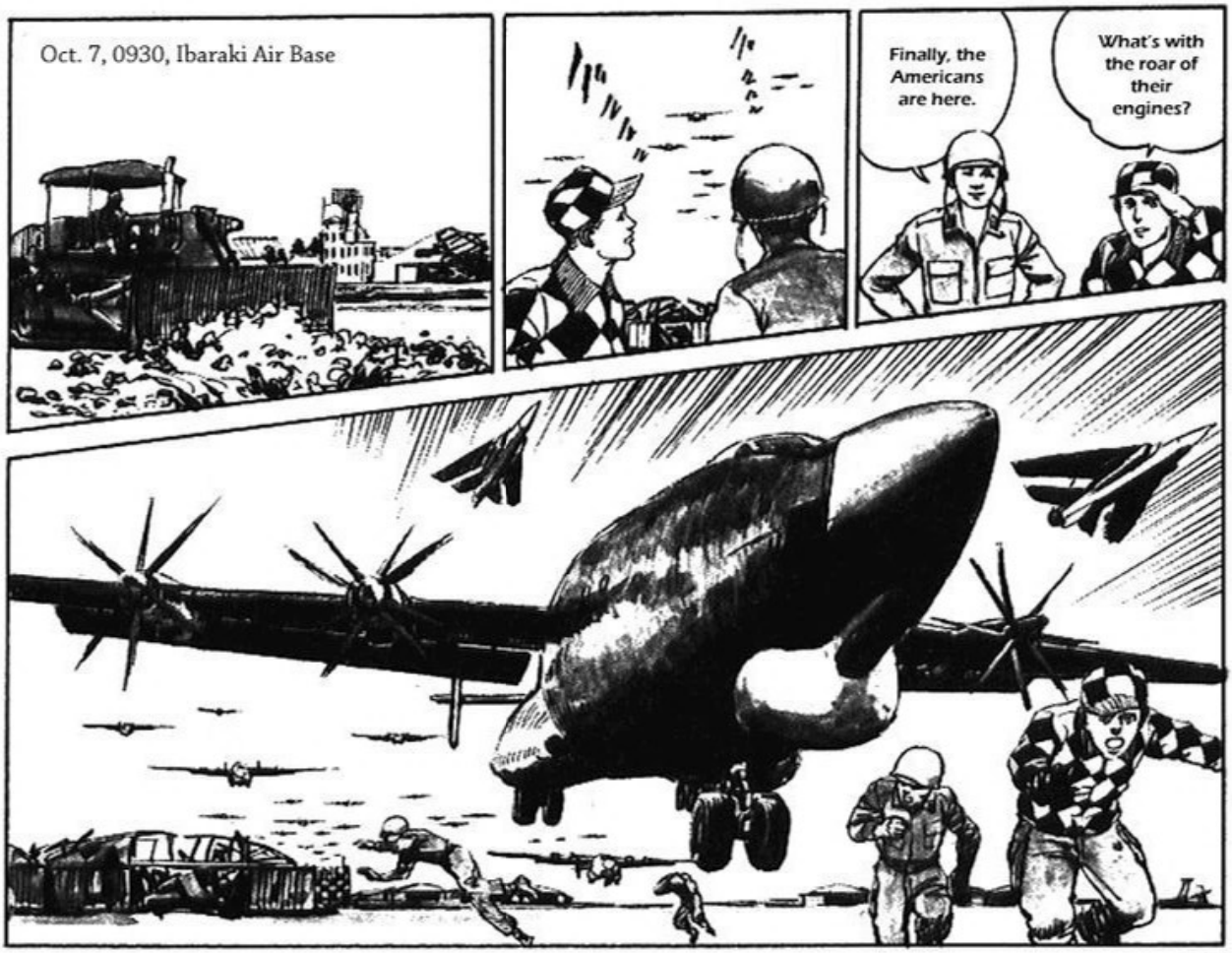


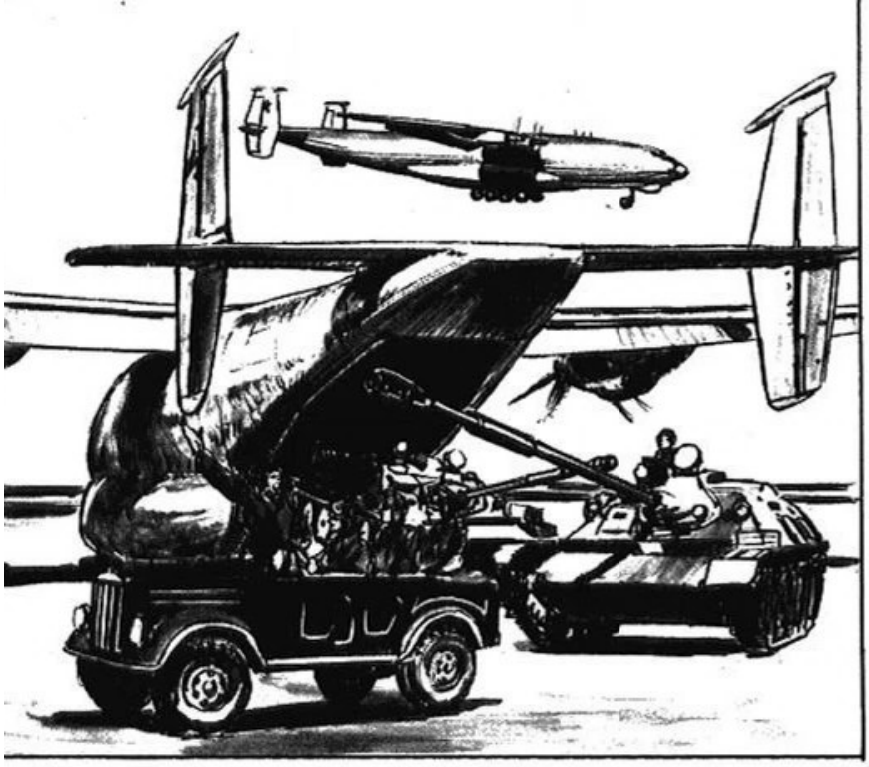


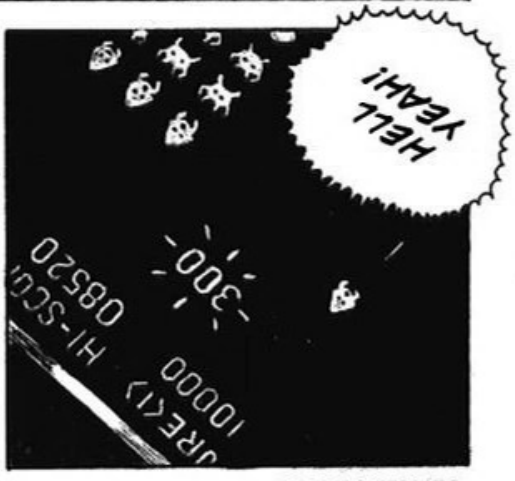


CHAAARGE!
Don't count on the Americans to come save us! Don't let a single commie pass until the war's over!
23

Advance all the way to Tokyo! Don't forget that your fathers never stopped until they reached Berlin!


Oct. 7, 0930, Ibaraki Air Base
Finally, the Americans are here.
What's with the roar of their engines?





Translated by Hox

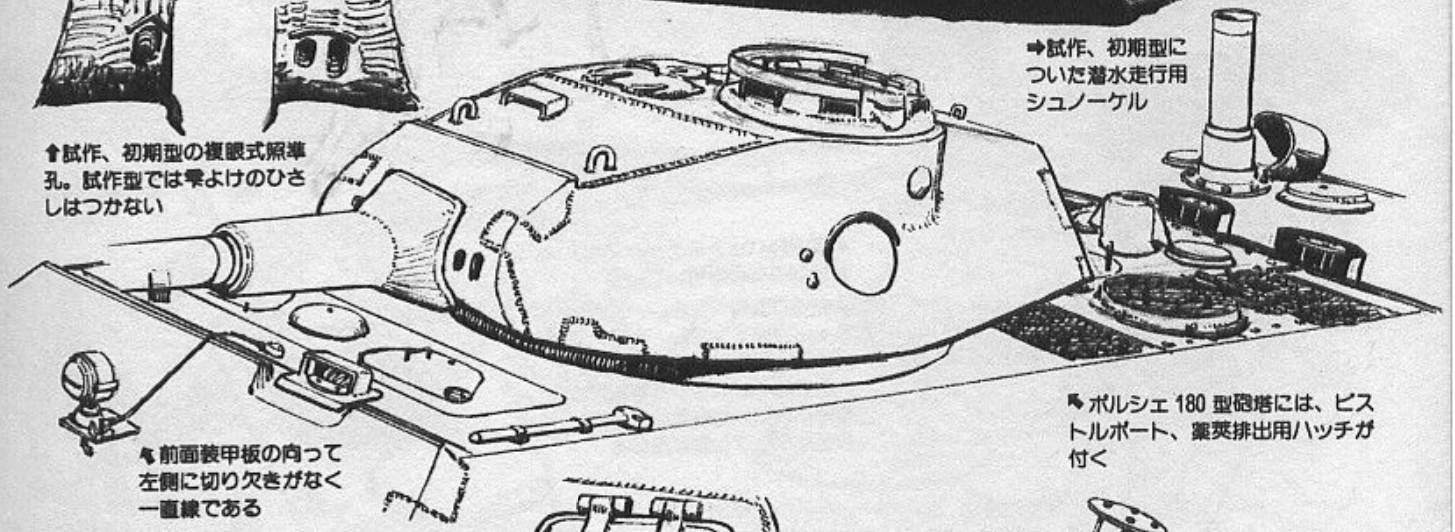
ティーゲルIIのバリエーション

●ポルシェ試作、初期型（ポルシェ180型砲塔）

1942年8月、ヒトラーの指示により、MAN社のパンテルをモデルとした71口径88㎜砲装備の重戦車計画が、ポルシェとヘンシェル両社に出された。1943年2月、陸軍兵器局の審査により、ポルシェタイプは車輌整備の一貫性の為、生産済の50基の砲塔のみが採用され、ヘンシェルの車体に搭載された。

↑ポルシェ砲塔装備の試作第一号車の前部フェンダー

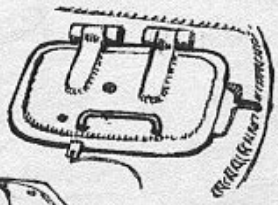
↑試作、初期型の複眼式照準孔。試作型では雪よけのひさしはつかない



→試作、初期型についた潜水走行用シュノーケル

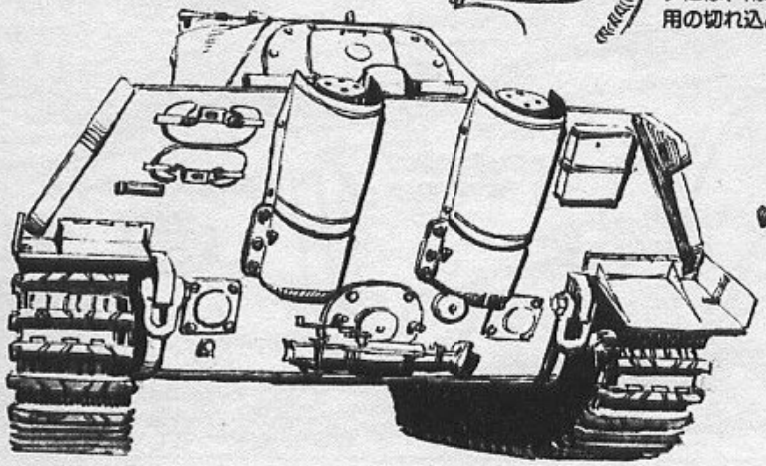
↖ポルシェ180型砲塔には、ピストルポート、薬莢排出用ハッチが付く

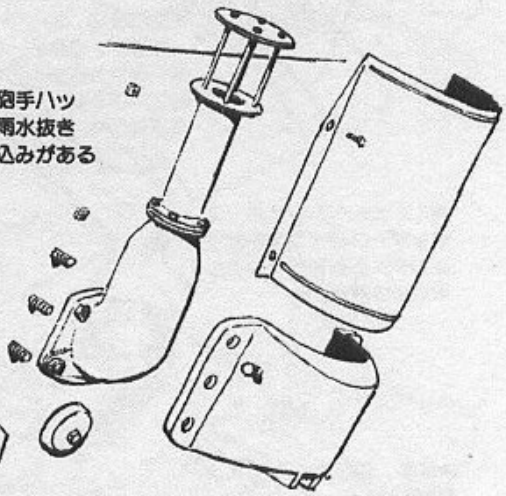
↖前面装甲板の向って左側に切り欠きがなく一直線である



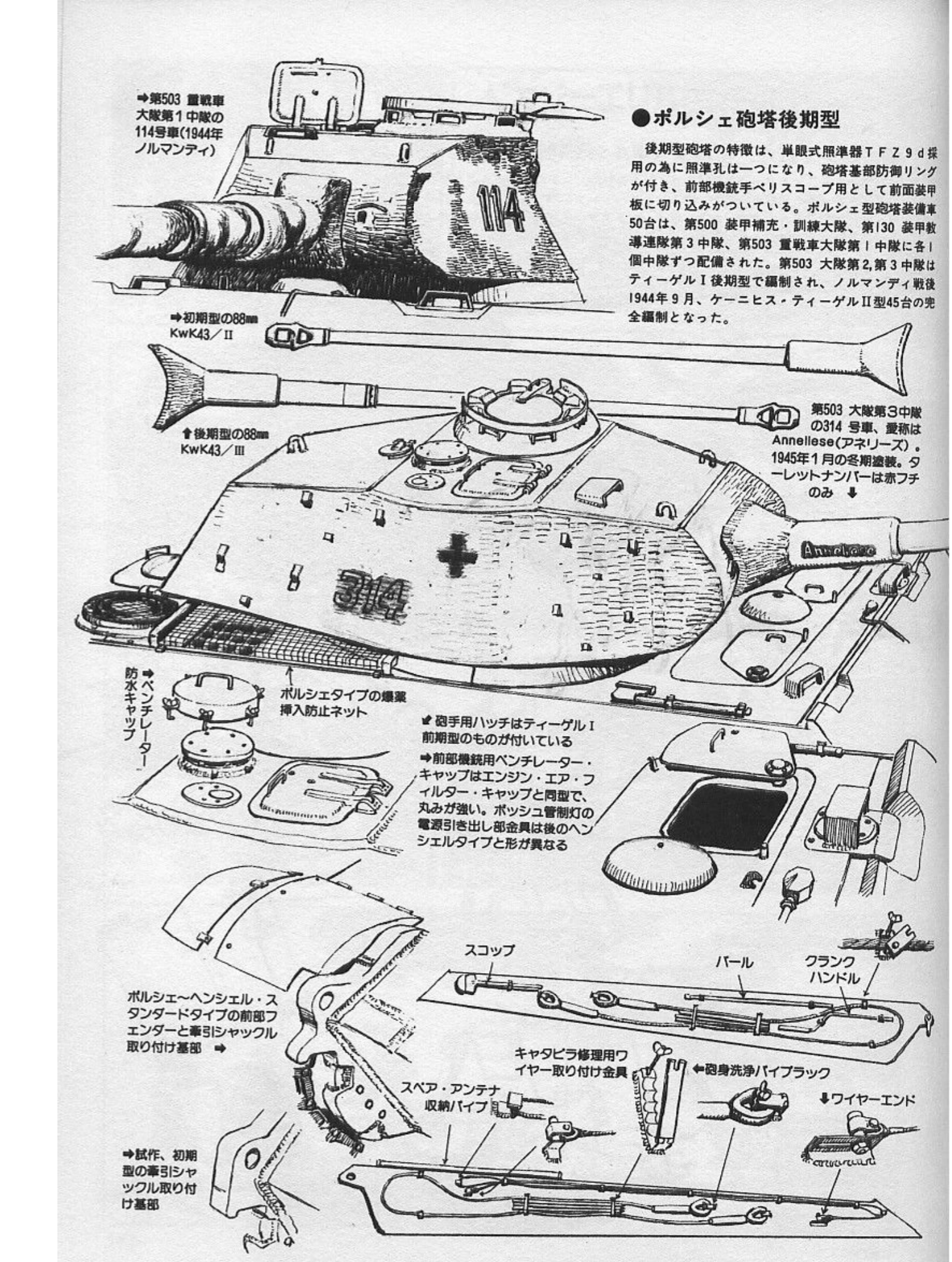
←試作型砲手ハッチには、雨水抜き用の切れ込みがある

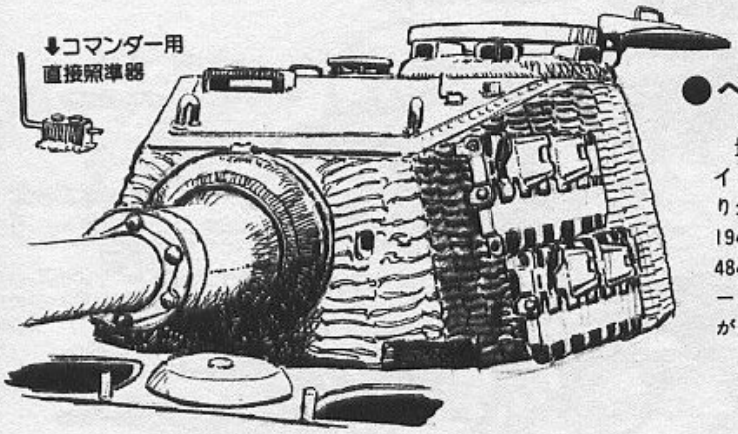
↓試作、初期型の後部





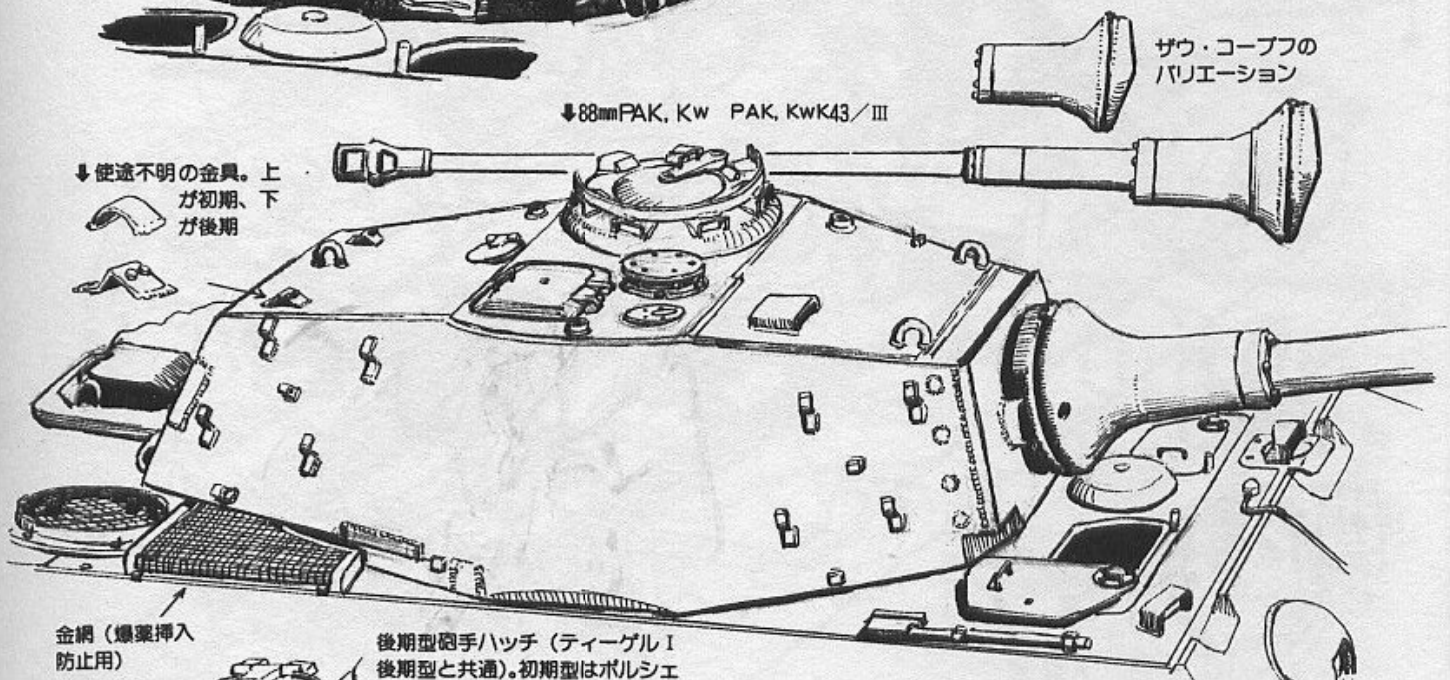
↑試作、初期型ヘンシェル車体のエキゾーストパイプとその装甲板


➡第503 重戦車大隊第1中隊の114号車(1944年ノルマンディ)
114
●ポルシェ砲塔後期型
後期型砲塔の特徴は、単眼式照準器TFZ9d採用の為に照準孔は一つになり、砲塔基部防御リングが付き、前部機銃手ペリスコープ用として前面装甲板に切り込みがついている。ポルシェ型砲塔装備車50台は、第500 装甲補充・訓練大隊、第130 装甲教導連隊第3中隊、第503 重戦車大隊第1中隊に各1個中隊ずつ配備された。第503 大隊第2,第3中隊はティーゲルI後期型で編制され、ノルマンディ戦後1944年9月、ケーニヒス・ティーゲルII型45台の完全編制となった。
➡初期型の88mm KwK43／II
⬆後期型の88mm KwK43／III
第503 大隊第3中隊の314 号車、愛称はAnnelise(アネリーズ)。1945年1月の冬期塗装。ターレットナンバーは赤フチのみ ⬇
314
Annelise
➡ベンチレーター防水キャップ
ポルシェタイプの爆薬挿入防止ネット
⬋砲手用ハッチはティーゲルI前期型のものが付いている
➡前部機銃用ベンチレーター・キャップはエンジン・エア・フィルター・キャップと同型で、丸みが強い。ポッシュ管制灯の電源引き出し部金具は後のヘンシェルタイプと形が異なる
スコップ
バール
クランクハンドル
ポルシェ～ヘンシェル・スタンダードタイプの前部フェンダーと牽引シャックル取り付け基部 ➡
キャタピラ修理用ワイヤー取り付け金具
←砲身洗浄パイプラック
スペア・アンテナ収納パイプ
⬇ワイヤーエンド
➡試作、初期型の牽引シャックル取り付け基部

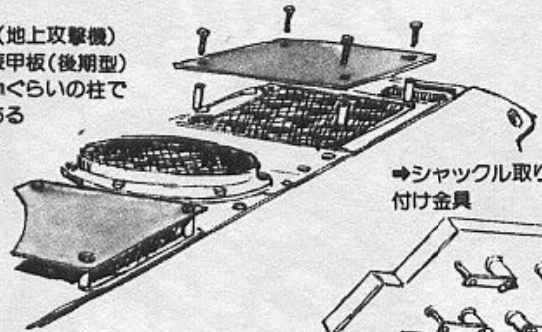


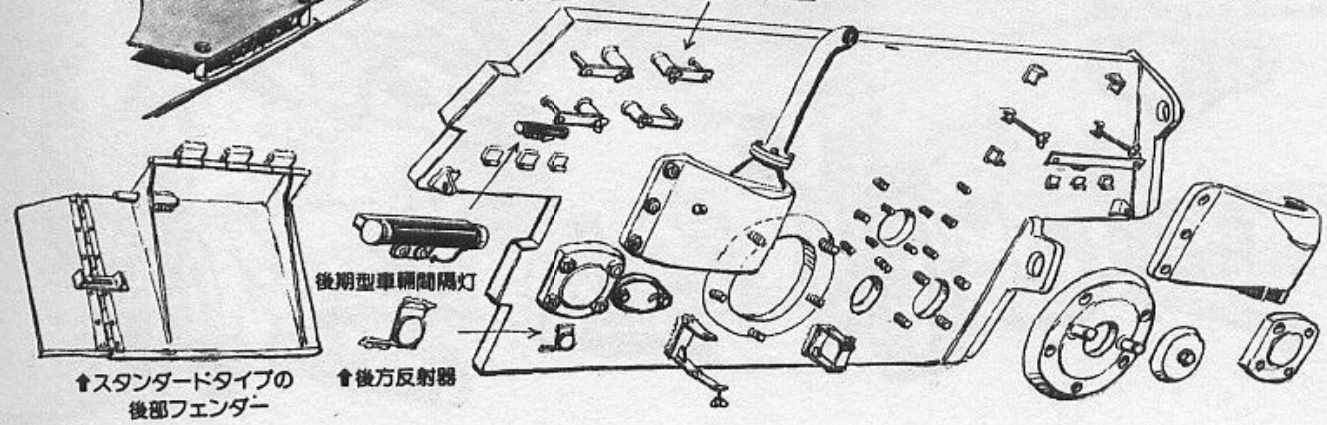
●ヘンシェル型ケーニヒスティーゲル

量産に適しているとして、陸軍兵器局により生産ラインに乗せられたのがヘンシェル型で、1944年2月より生産が始まり、ポルシェ型砲塔装備車50台を含め、1944年度中に377台、1945年1～3月までに107台、合計で484 台のポルシェ～ヘンシェル型ティーゲルII型（ケーニヒスティーゲル，又はSdkfz182 ティーゲルBs）が生産された。

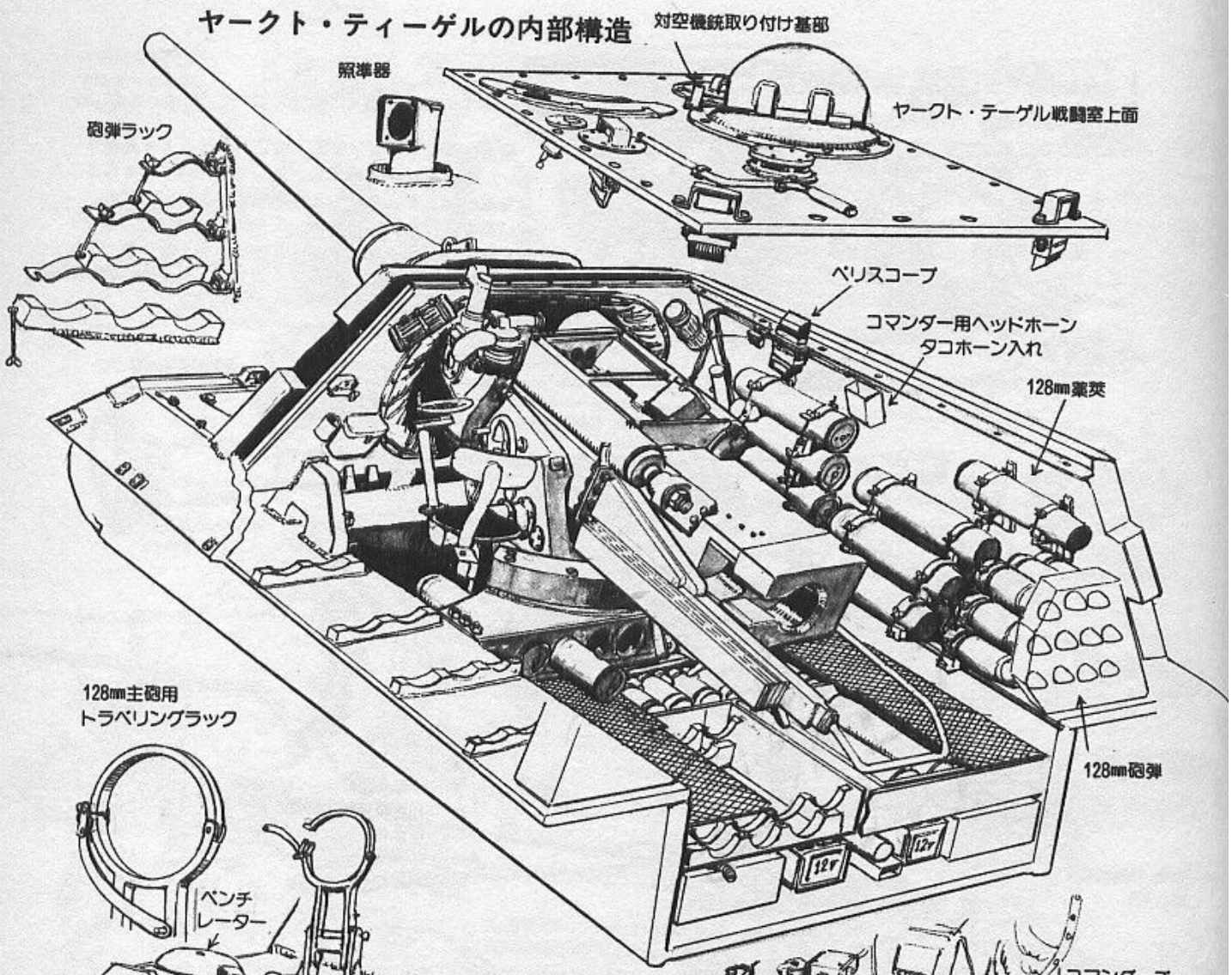


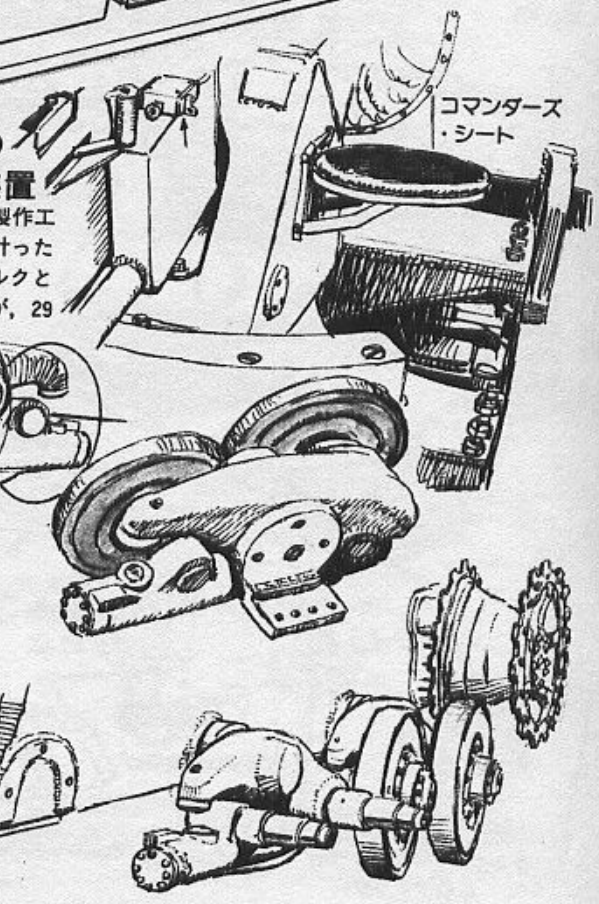
初期型ベンチレーターは、砲塔防盾との干渉をさける為、角を削ってある。後期型ベンチレーターは高さが低いので、削られていない。操縦手用ペリスコープ・ガードの角も削られている





ヤークト・ティーゲルの内部構造



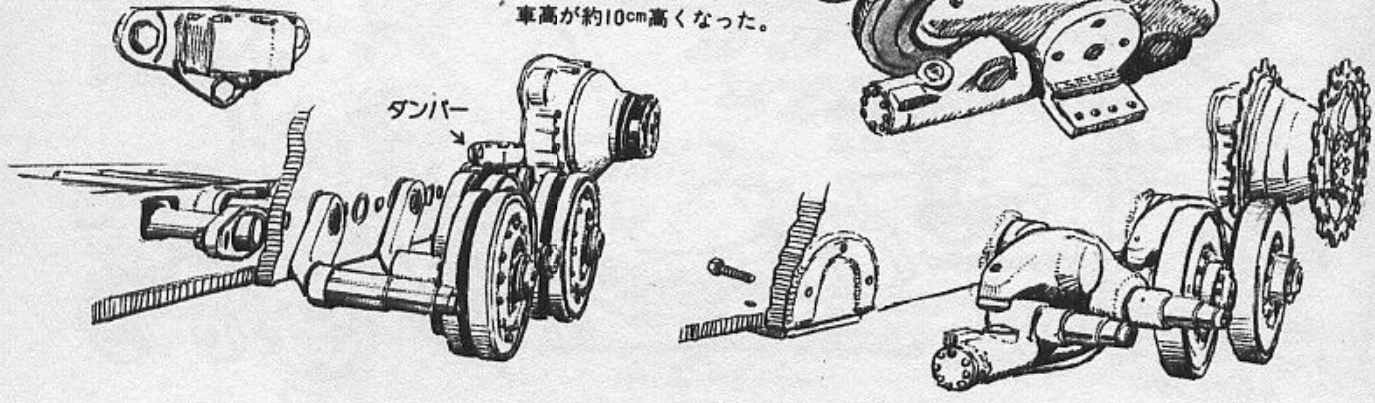


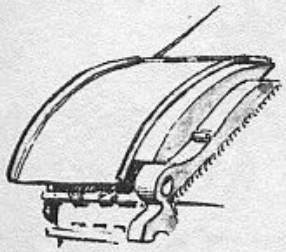
●ポルシェ方式の懸架装置

ポルシェ型懸架装置は，製作工程の簡略化，低コスト化を計ったもので 462,000ライヒスマルクとヘンシェル型の半分で済むが，29台しか製作されなかった。ポルシェ方式では，ヘンシェル方式よりも車高が約10㎝高くなった。

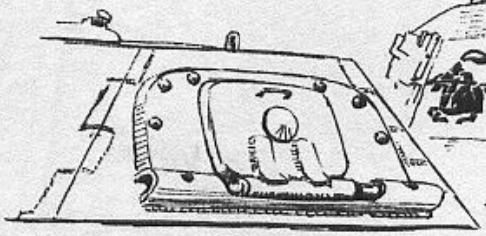
●ヘンシェル型シャーシ（トーションバー方式）

パンテル，ティーゲルⅠと同様の懸架方式だが，製作工程が長く，製作費が一台あたり866,000 ライヒスマルクかかる。試作型２台を含め50台製作された。

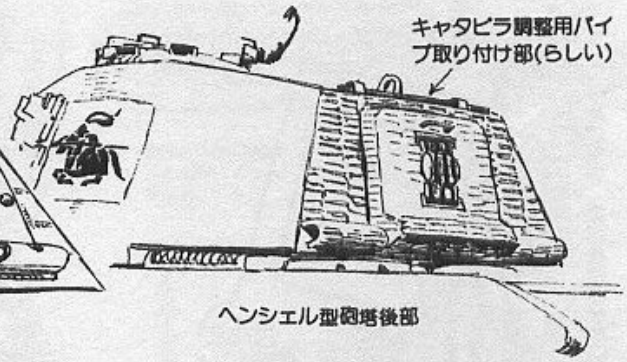




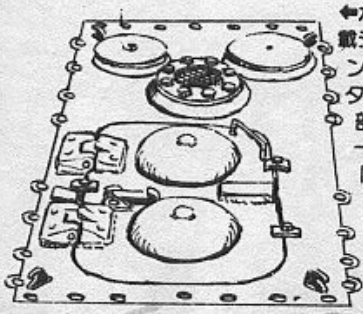
ヘンシェル型ケーニヒスティーゲル後期型の前部フェンダー



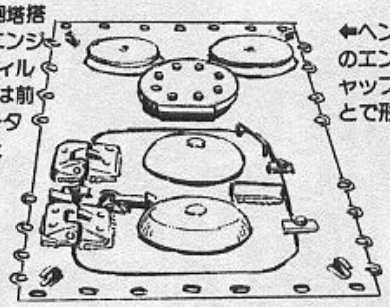
ポルシェ型砲塔後部



ヘンシェル型砲塔後部



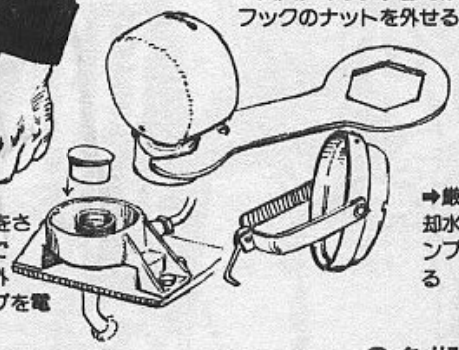
⬅ポルシェ型砲塔搭載シャーシのエンジンデッキ。フィルターキャップは前部ベンチレーターキャップと同型



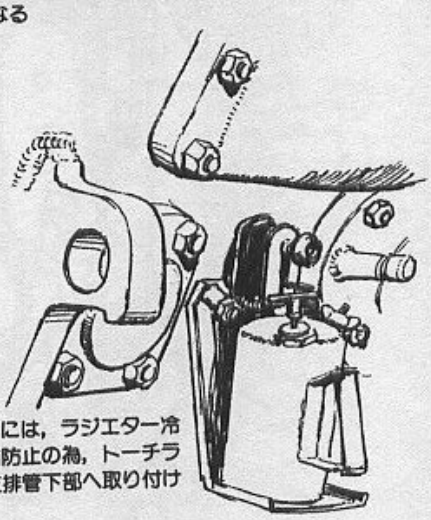
⬅ヘンシェル型砲塔搭載シャーシのエンジンデッキ。フィルターキャップは，前のものと後のものとで形が異なる

●ボッシュ型管制灯の外し方

戦闘による損傷をさける為，スパナで回してランプを外し，防水キャップを電極にかぶせる

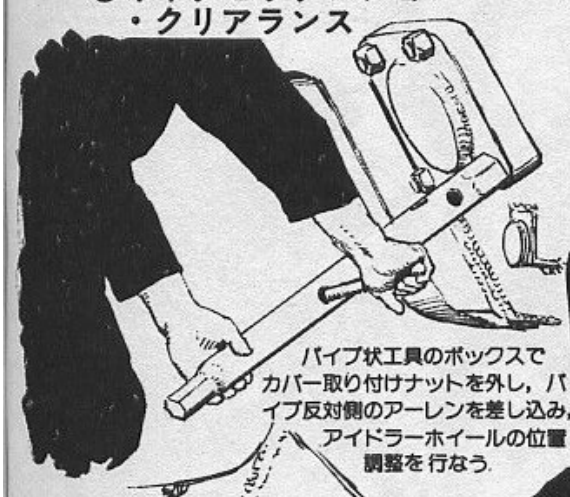


⬇スパナのリング部では，フックのナットを外せる

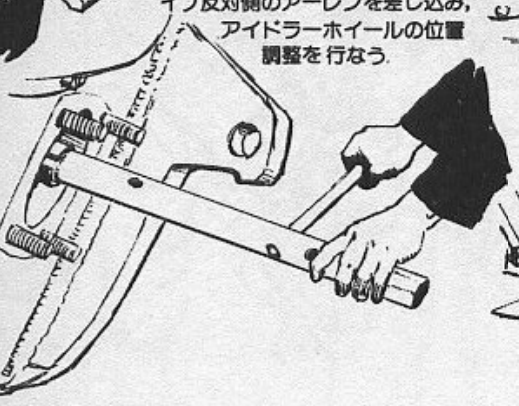


➡厳冬期には，ラジエター冷却水凍結防止の為，トーチランプを左排管下部へ取り付ける

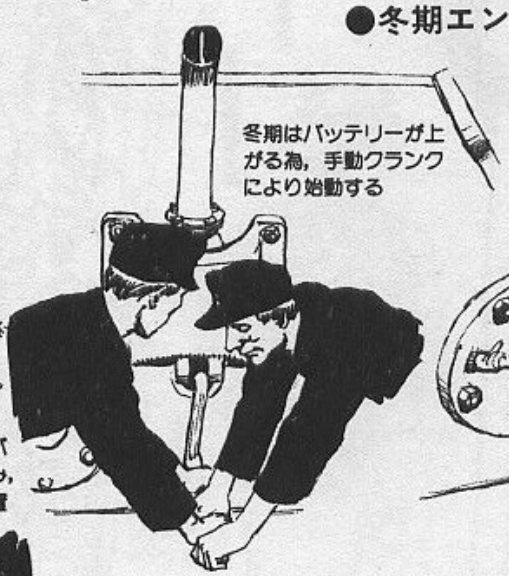
●キャタピラテンション・クリアランス



パイプ状工具のボックスでカバー取り付けナットを外し，パイプ反対側のアーレンを差し込み，アイドラーホイールの位置調整を行なう

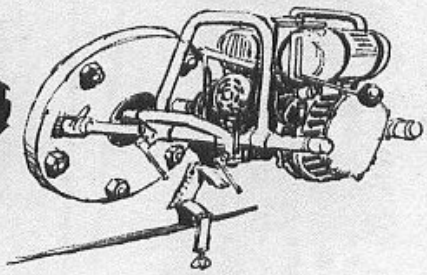


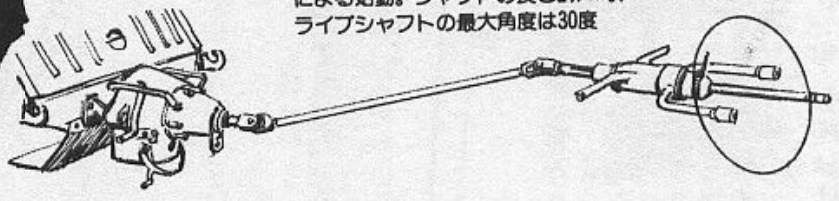
●冬期エンジン始動方法



冬期はバッテリーが上がる為，手動クランクにより始動する

⬇エンジン付始動機

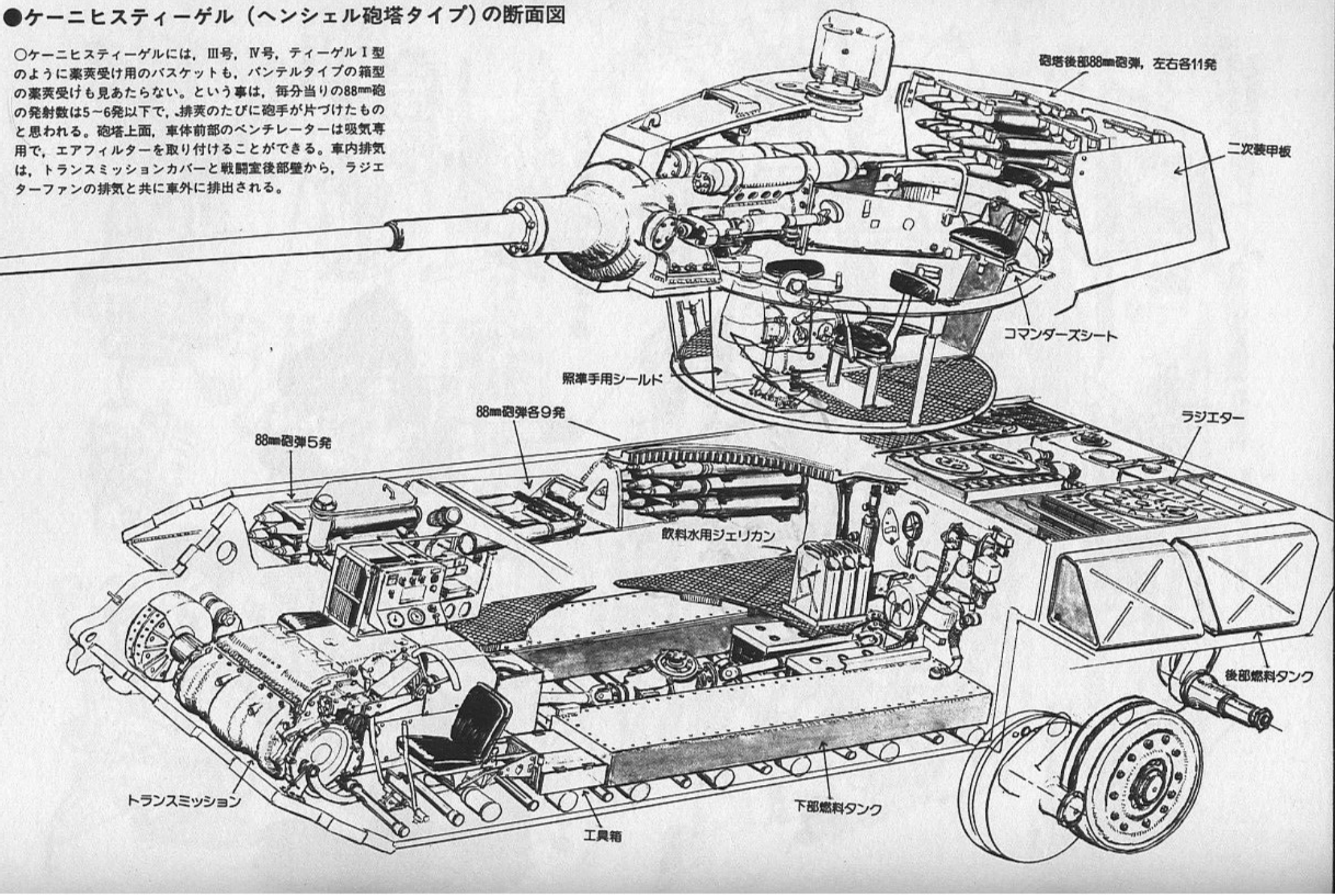




キューベルワーゲンエンジン伝達方式による始動。シャフトの長さ2.7m。ドライブシャフトの最大角度は30度

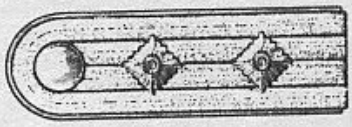
●ケーニヒスティーゲル（ヘンシェル砲塔タイプ）の断面図

○ケーニヒスティーゲルには，Ⅲ号，Ⅳ号，ティーゲルⅠ型のように薬莢受け用のバスケットも，パンテルタイプの箱型の薬莢受けも見あたらない。という事は，毎分当りの88㎜砲の発射数は5～6発以下で，排莢のたびに砲手が片づけたものと思われる。砲塔上面，車体前部のベンチレーターは吸気専用で，エアフィルターを取り付けることができる。車内排気は，トランスミッションカバーと戦闘室後部壁から，ラジエターファンの排気と共に車外に排出される。



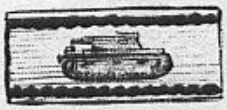
戦車兵ユニフォーム

戦車兵ユニフォーム。当主人公は主に後期型フィルドグレイ戦車服で、ブラックユニフォームはあまり着用しない。ブラックユニフォームは、襟章の兵科色の他に、襟に兵科の廃止された後期型に分けられるが、カモフラージュ効果を考えて、フィルドグレイの戦車服も採用されていた。右は戦車兵襟章。黒地に銀のトーテンコープフ。フチ取りは兵科色のピンク。



戦車兵大尉の肩章。シルバーグレイの肩章に2つ星、フチ取りは兵科色のピンク。

一級鉄十字章。二級は略授（リボン）をボタンホールにつける。



肉弾戦車撃破記章。戦車猟兵大隊配属当時に5台を撃破し、金章を授章した。

41／42年東部戦線従軍章。略授をボタンホールに飾った。

戦車突撃記章。75回以上の突撃戦を経験。

戦傷章。5回以上の負傷のため金バッチ。

歩兵突撃記章。主人公が戦車猟兵大隊へ転出した時に授章した。

クリミア楯章。クリミアの一次攻撃、二次攻撃に参加した将兵に授与された。

1934年支給の戦車用ベレー帽（シュッツミッツ））。内側がフェルト製だったが、ヘッドホーンがうまく合わず、1941年1月に中止となる。

38年型略帽。38年以降、黒ベレーと併用して支給された。兵科色のピンクが付いている。

42年型略帽。防寒対策の一環として製造された。

黒ベレーの廃止後、38年型略帽の戦車兵用黒色が支給された。将校用は銀すじが入る。

兵、下士官用38年型略帽

43年型略帽

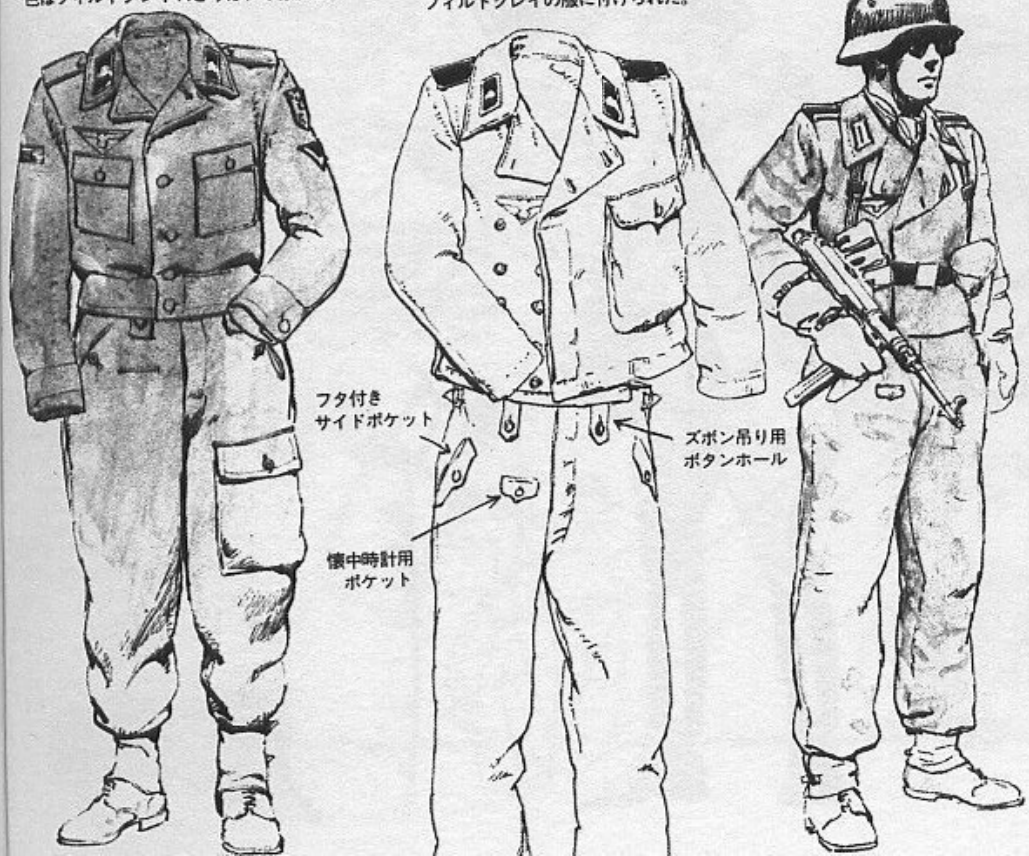
1944年型。DAK（ドイツアフリカ軍団）規格帽と同型の戦車兵用略帽。

1942年以降、兵科色廃止の38年型略帽が支給された。

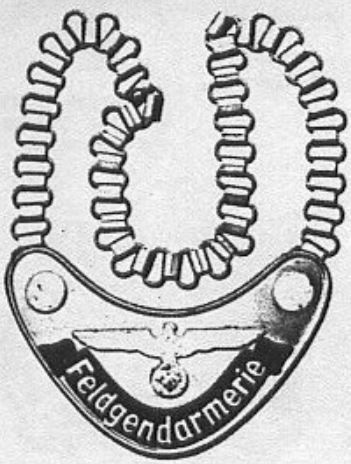
最後期型戦車兵ユニフォーム。上衣は43年秋より支給され始めたM44ユニフォームで、陸、海、空共通の省略型で、英軍戦闘服に似ている。将校用はM35のような胸ポケットが付いている。ズボンは43年より支給された装甲車輌搭乗員用で、ヒザの大きなポケットが特徴。色はフィルドグレイ44と呼ばれる茶灰色。

1942年支給のデニム製リードグリーン色の戦車兵作業服。冬は戦車兵黒服の上に着用でき、夏には夏服として使用された服の合わせが縦2列のボタンで調節でき、重ね着が可能だった。

装甲師団の装甲擲弾兵、工兵にも支給された戦車兵スタイルの戦闘服。戦車猟兵、戦車捜索大隊は戦車兵襟章をフィルドグレイの服に付けられた。



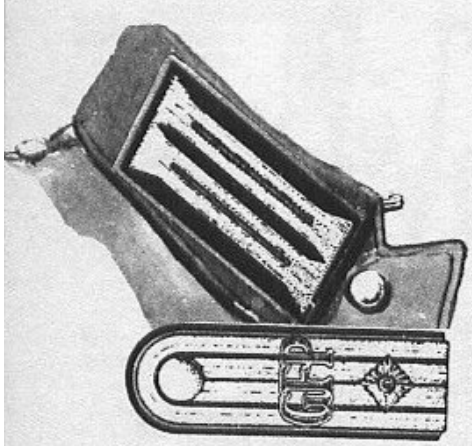
Feldgendarmerie



←野野憲兵胸章（リングリラゲン）。シルバーメタルフィニッシュで左右の円、鷲、黒帯の中のフィルドゲンダルメリアの文字は金色（夜光塗料付き）。大きさは幅16.5cm。兵士達はこの胸章を付けているため、野戦憲兵を番犬と呼んでいた。

←野戦憲兵アームバンド。左袖着用。

⬇野戦憲兵襟章。銀色の襟章には２本の赤線が入り、下士官を示す銀モール（43年以降はグレイ）が付いている。下は野戦憲兵上級曹長肩章。銀モールに２つ星、兵科色のフチ取りはオレンジ。



野戦憲兵は軍事組織の警察として、陸、海、空及びＳＳ内部にも設立された。その管理責任は広く、陸軍の作戦遂行の他、野戦部隊の交通整理、飛行場整備、対テロリスト、戦線後方のパトロール、野戦部隊の軍規の保全等であり、怠慢な者を検挙する事が出来る。また２名の憲兵少佐で即決軍法会議を設立し処理出来た。全階級の野戦憲兵は通常の歩兵戦闘訓練を受けており、陸軍のユニフォームを着用した。

野戦憲兵大隊は３個中隊で編成され、憲兵１個中隊は将校４名、下士官90名、兵士22名、憲兵補助員22名で編成され、トラック７台、サイドカー28台で構成され、野戦憲兵大隊は軍司令部に所属し、憲兵中隊は３個小隊で編成され、各小隊は軍団所属の師団司令部へ配属された。

秘密野戦憲兵（ＧＦＰ）は野戦憲兵より選抜された将校が任名され、主な仕事は軍事機密の維持、軍参謀部のＩＣ／ＡＯ（情報将校）など。

←将軍（軍司令官）の襟章、赤の台布に金色のかざり。

⬆秘密野戦憲兵将校襟章。ダークグリーン地に銀の襟章。２本の線は水色。フチ取りも水色。下は秘密野戦憲兵中尉の肩章。秘密野戦憲兵の頭文字と一つ星は金色、フチ取りの兵科色は水色。

⬆大将の肩章。赤の台布に金、銀の縁り、銀星２つ。

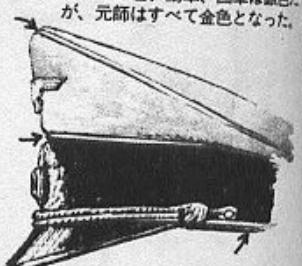
➡プー・ル・メリット勲章（第一次大戦時の物で、当時の騎士十字章に相当する）

⬇オートバイ兵用ゴムコート。サイドカー、自動車部隊の運転兵及び将校に支給された。初期型はダークグリーンの布の襟だが、後期型はフィルドグレイの布襟となった。

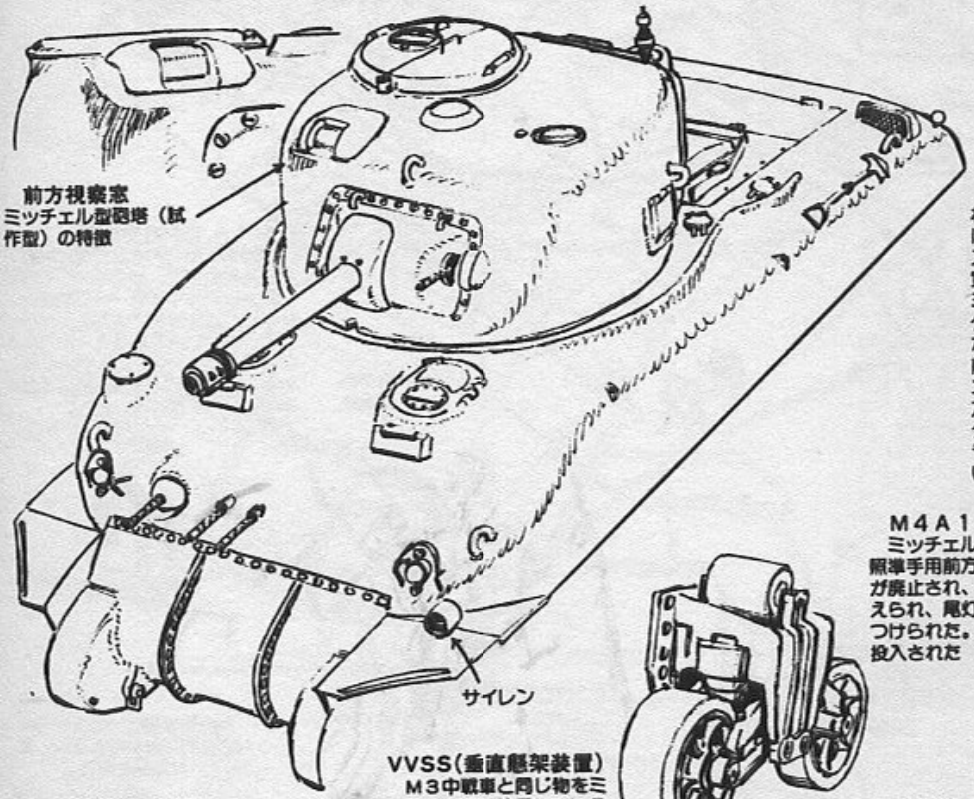
⬇上着の前合わせには将軍を示す赤線が入っている。上着たけにも違いはある。袖の折り返しには地図などをはさみ込んでいる。

⬇第３ボタンホールに付けられた第一次大戦の２級鉄十字章の略授と、その上には第二次大戦の１級鉄十字章の略章が付けられている。右が第一次大戦の２級鉄十字章。

⬇将軍階級の制帽は、軍帽のフチ取りは金色、鷲章、国章は銀色だが、元師はすべて金色となった。



イラストで見るM4シャーマンのバリエーション
SHERMAN TANKS

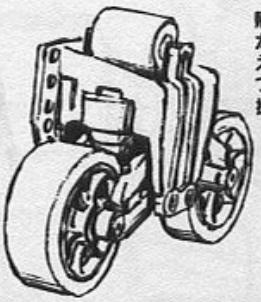


前方視察窓
ミッチェル型砲塔（試作型）の特徴

サイレン

M4A1　ミッチェル型
1942年2月、M4より遅れて制式化したが量産は先に行なわれ、レンド・リース法により英国へ送られて宣伝に使用された。特徴はミッチェル型砲塔でカウンターウェイト付きの31口径75mm砲M2を装備し、車体前方の固定式30口径ブローニング機銃2挺、操縦席前方の直視型バイザーブロックがあり、後部の尾灯にはライトガードが付いていない

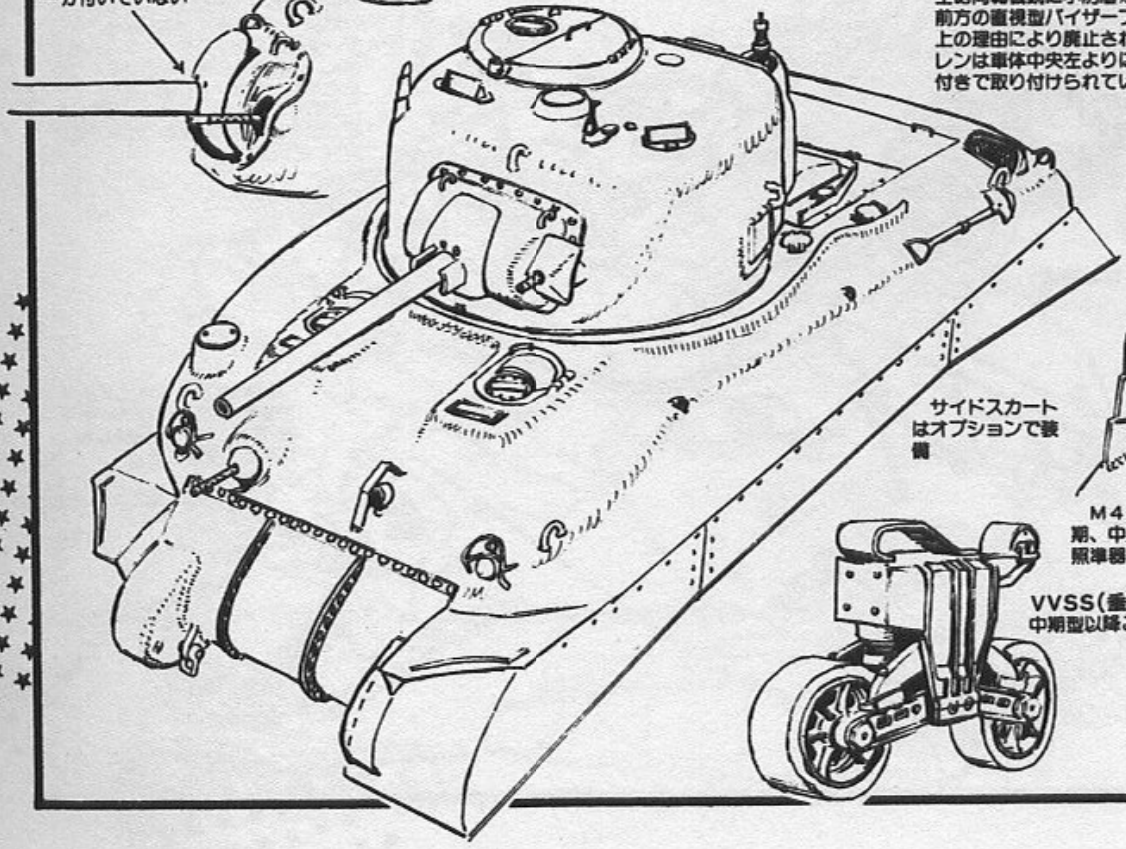
M4A1　初期型
ミッチェル型に比べ戦闘仕様になり、照準手用前方視察窓、前方固定銃2挺が廃止され、主砲も40口径75mm砲に変えられ、尾灯にもライトガードが取りつけられた。北アフリカで初めて実戦投入された



VVSS(垂直懸架装置)
M3中戦車と同じ物をミッチェル型は使用している

主砲連動砲架M32中期型
前期ももっとも初期の物は主砲のサイドガードアーマーが付いていない

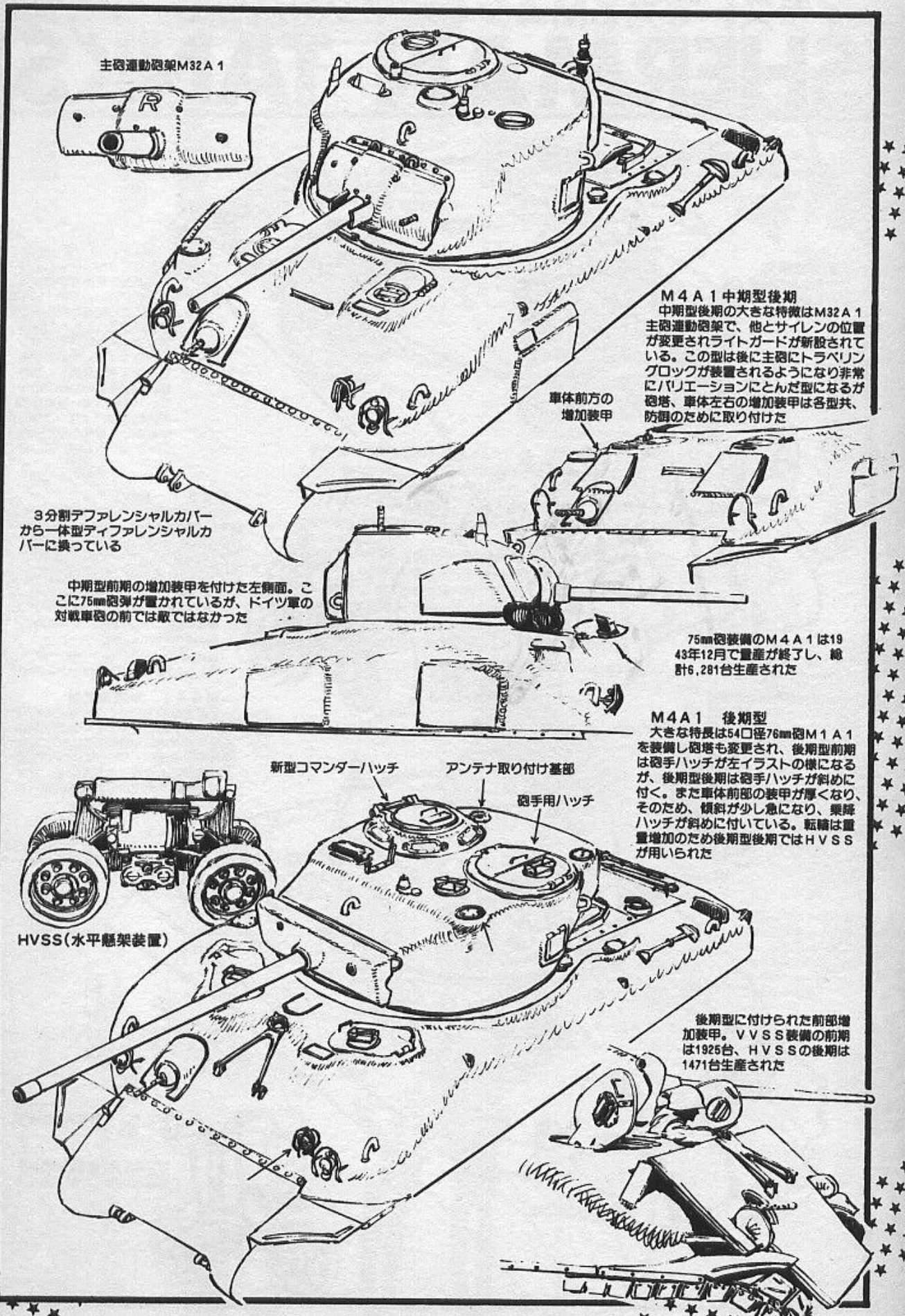
M4A1　中期型前期
中期型前期でもっとも初期のものは左に示した通りである。中期型前期は主砲同軸機銃に小防盾が付いて、車体前方の直視型バイザーブロックが防御上の理由により廃止されている。サイレンは車体中央左よりに簡単なガード付きで取り付けられている



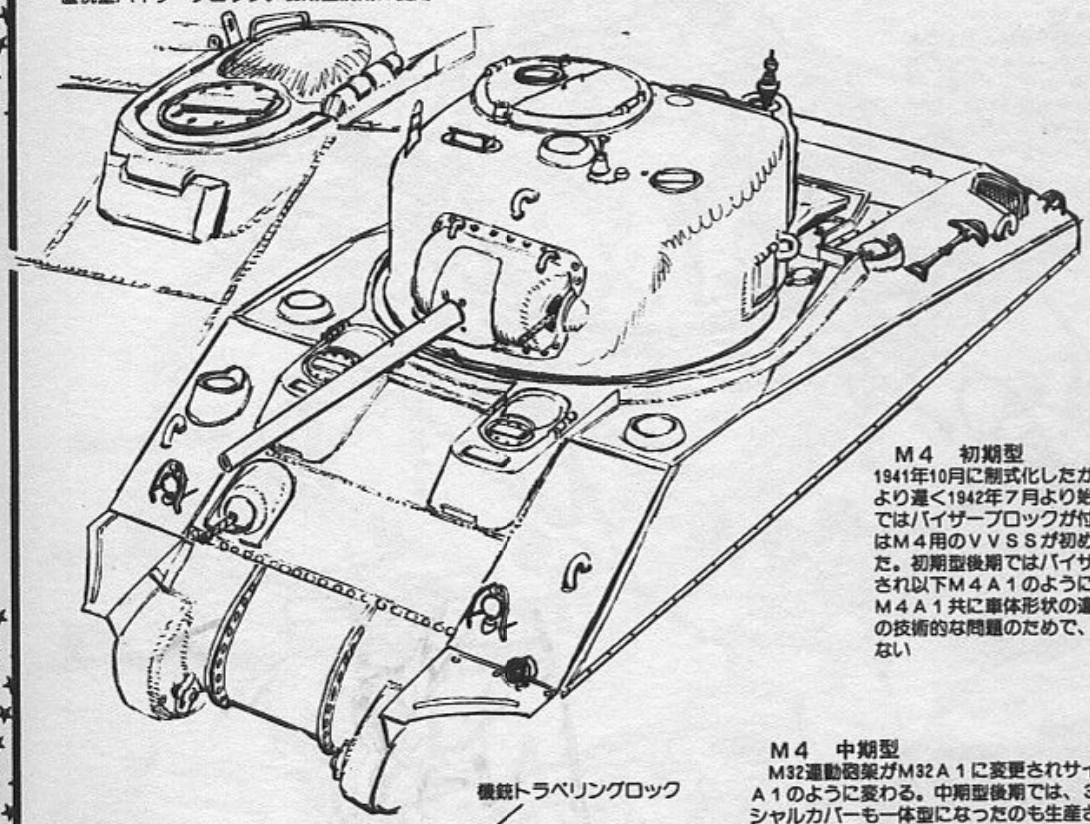
サイドスカートはオプションで装備

M4A1、M4の初期、中期型共通の直接照準器

VVSS(垂直懸架装置)
中期型以降この型に換わる


主砲連動砲架M32A1
M4A1中期型後期
中期型後期の大きな特徴はM32A1主砲連動砲架で、他とサイレンの位置が変更されライトガードが新設されている。この型は後に主砲にトラベリングロックが装置されるようになり非常にバリエーションにとんだ型になるが砲塔、車体左右の増加装甲は各型共、防御のために取り付けた
車体前方の増加装甲
3分割デファレンシャルカバーから一体型ディファレンシャルカバーに換っている
中期型前期の増加装甲を付けた左側面。ここに75mm砲弾が置かれているが、ドイツ軍の対戦車砲の前では敵ではなかった
75mm砲装備のM4A1は1943年12月で量産が終了し、総計6,281台生産された
M4A1 後期型
大きな特長は54口径76mm砲M1A1を装備し砲塔も変更され、後期型前期は砲手ハッチが左イラストの様になるが、後期型後期は砲手ハッチが斜めに付く。また車体前部の装甲が厚くなり、そのため、傾斜が少し急になり、乗降ハッチが斜めに付いている。転輪は重量増加のため後期型後期ではHVSSが用いられた
新型コマンダーハッチ
アンテナ取り付け基部
砲手用ハッチ
HVSS(水平懸架装置)
後期型に付けられた前部増加装甲。VVSS装備の前期は1925台、HVSSの後期は1471台生産された

直視型バイザーブロック。初期型前期に使用



M４　初期型

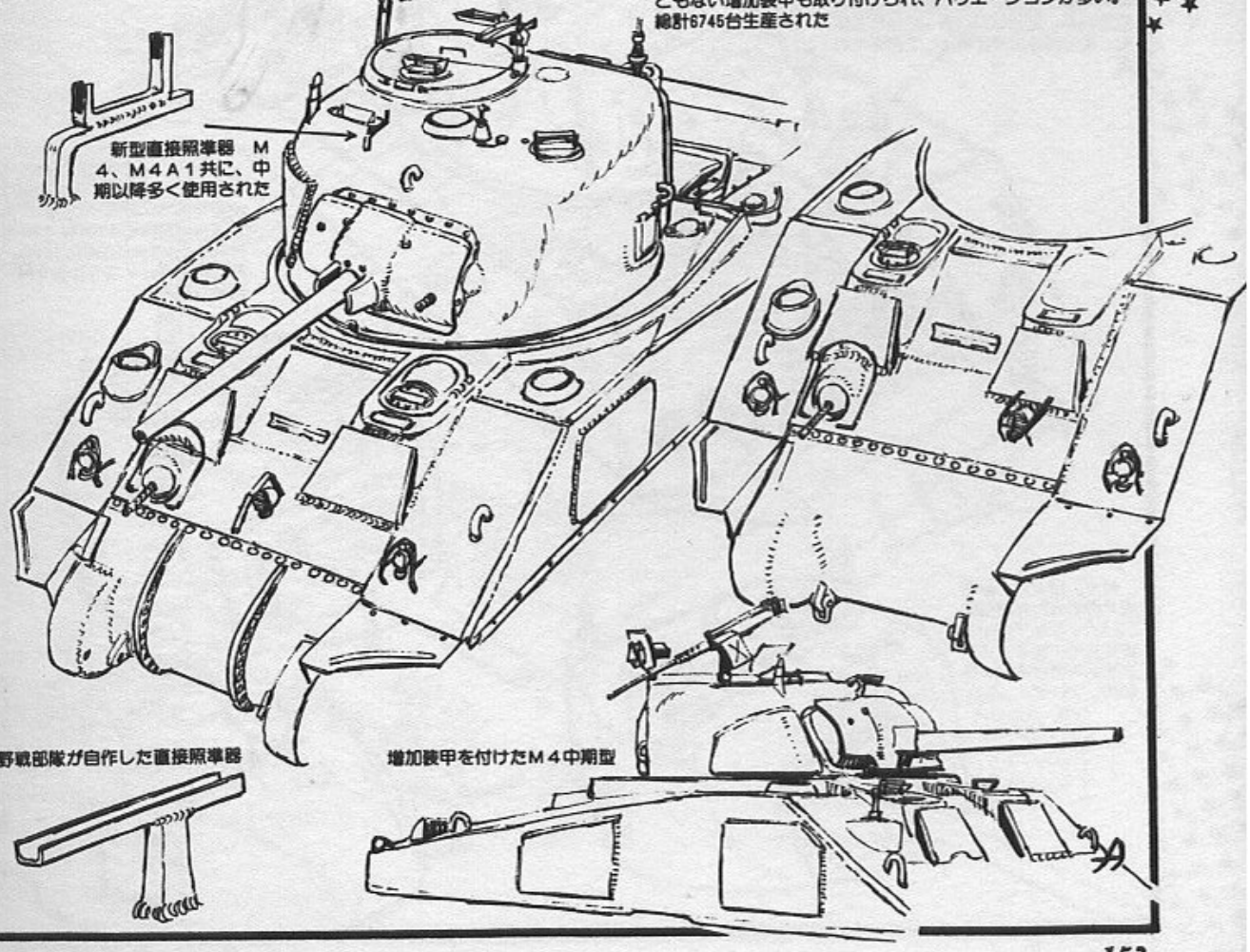
1941年10月に制式化したが、量産はＭ４Ａ１より遅く1942年７月より始った。初期型前期ではバイザーブロックが付いていたが、転輪はＭ４用のＶＶＳＳが初めから使用されていた。初期型後期ではバイザーブロックが廃止され以下Ｍ４Ａ１のように発展する。Ｍ４、Ｍ４Ａ１共に車体形状の違いは量産メーカーの技術的な問題のためで、内容装備に変りはない

M４　中期型

M32運動懸架がM32Ａ１に変更されサイレンの位置もＭ４Ａ１のように変わる。中期型後期では、３分割ディファレンシャルカバーも一体型になったのも生産され、戦闘の激化にともない増加装甲も取り付けられ、バリエーションが多い。総計6745台生産された

機銃トラベリングロック

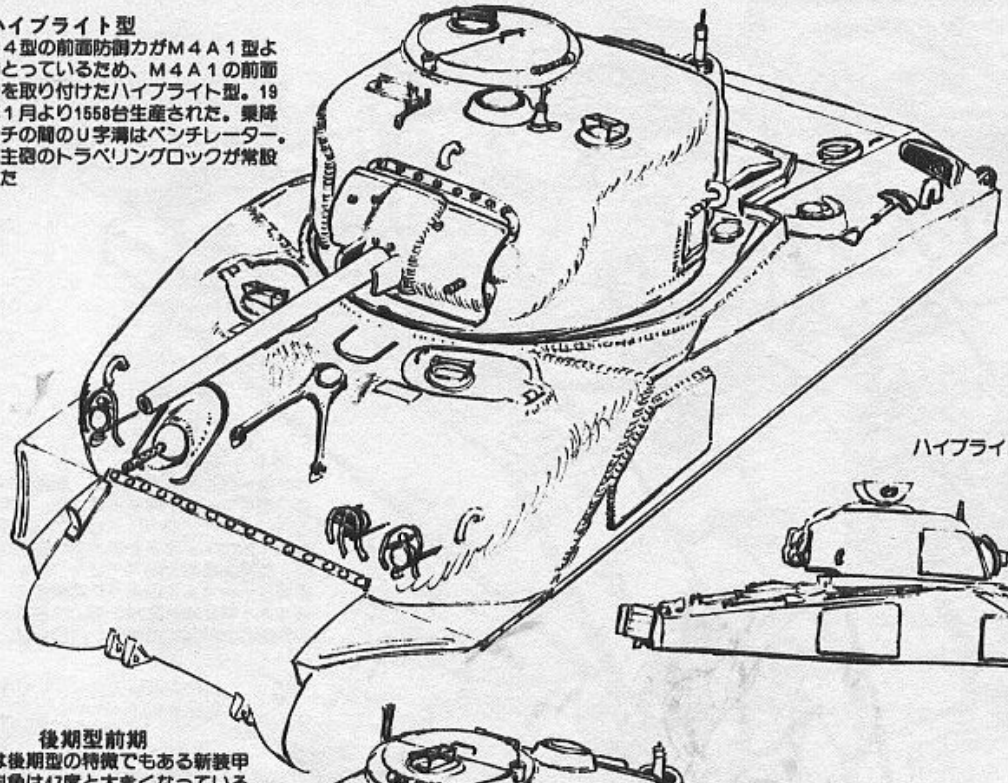
新型直接照準器　Ｍ４、Ｍ４Ａ１共に、中期以降多く使用された



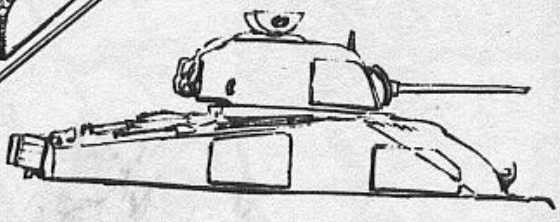
野戦部隊が自作した直接照準器

増加装甲を付けたＭ４中期型

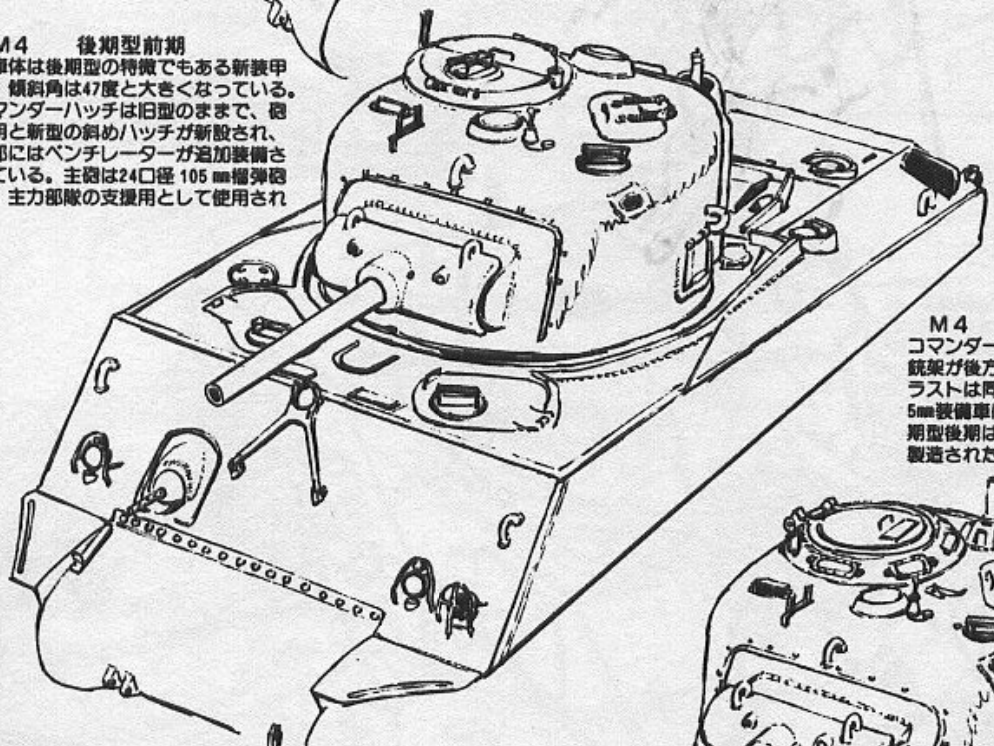
ハイブライト型
M４型の前面防御力がM４A１型よりおとっているため、M４A１の前面装甲を取り付けたハイブライト型。1944年１月より1558台生産された。乗降ハッチの間のU字溝はベンチレーター。75㎜主砲のトラベリングロックが常設された



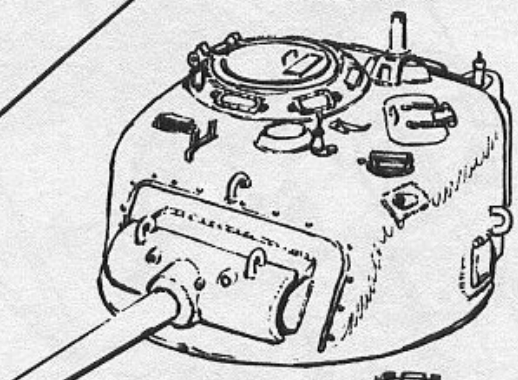
ハイブライト型の左側面

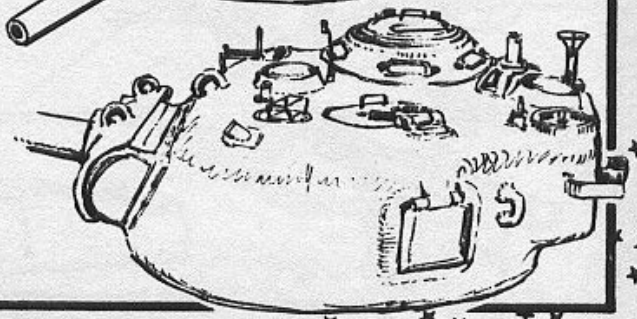


M４　後期型前期
車体は後期型の特徴でもある新装甲で、傾斜角は47度と大きくなっている。コマンダーハッチは旧型のままで、砲手用と新型の斜めハッチが新設され、後部にはベンチレーターが追加装備されている。主砲は24口径105㎜榴弾砲で、主力部隊の支援用として使用された

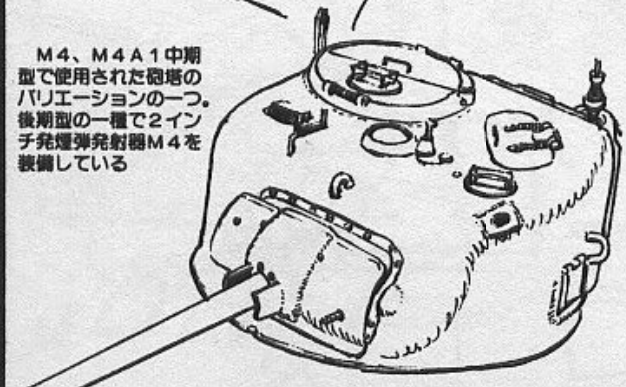


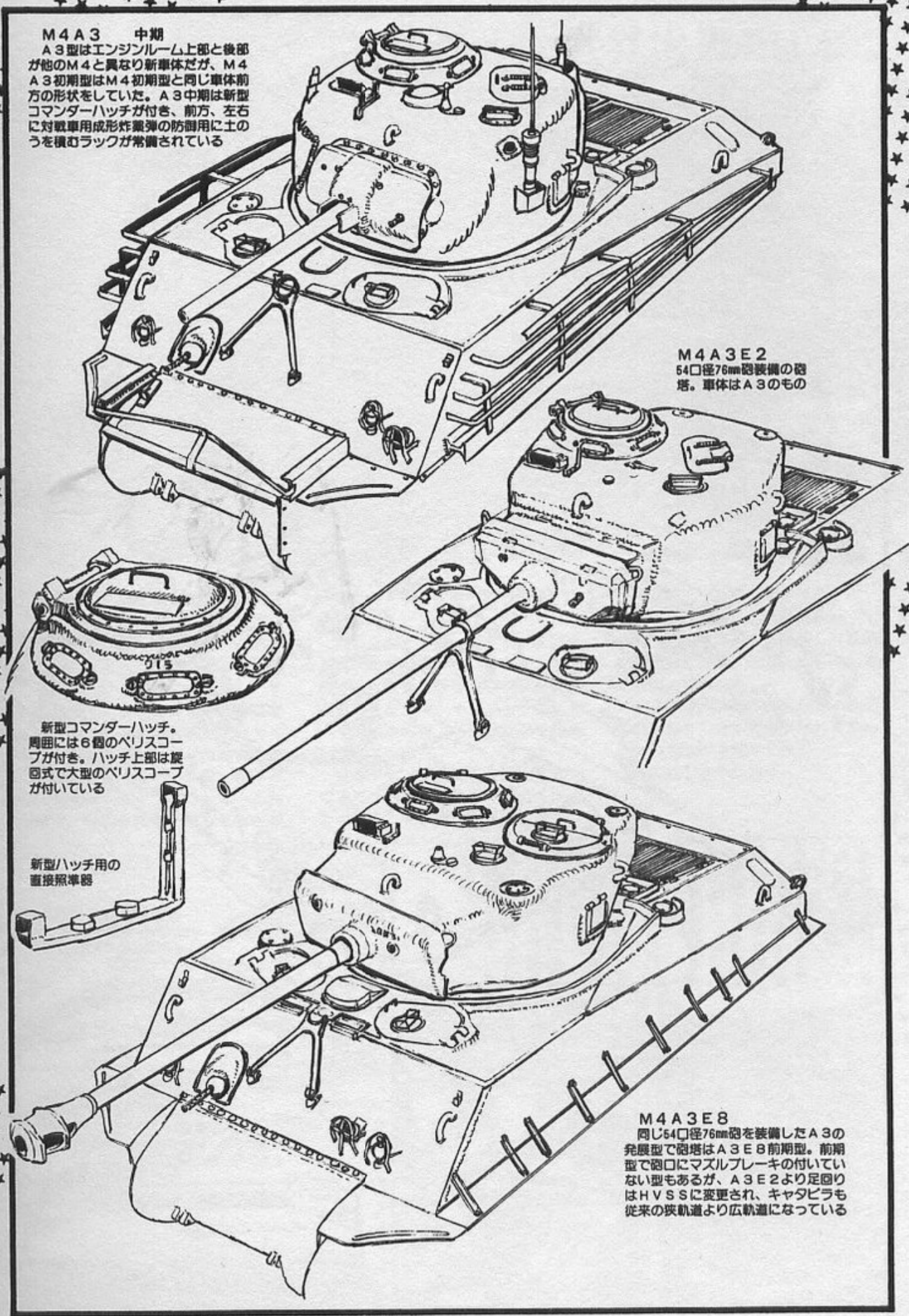
M４　後期型後期
コマンダーハッチが新型になり機銃架が後方に新設された。下のイラストは同砲塔の側面。M４型105㎜装備車は800台製造された。後期型後期はＨＶＳＳ仕様で841台製造された

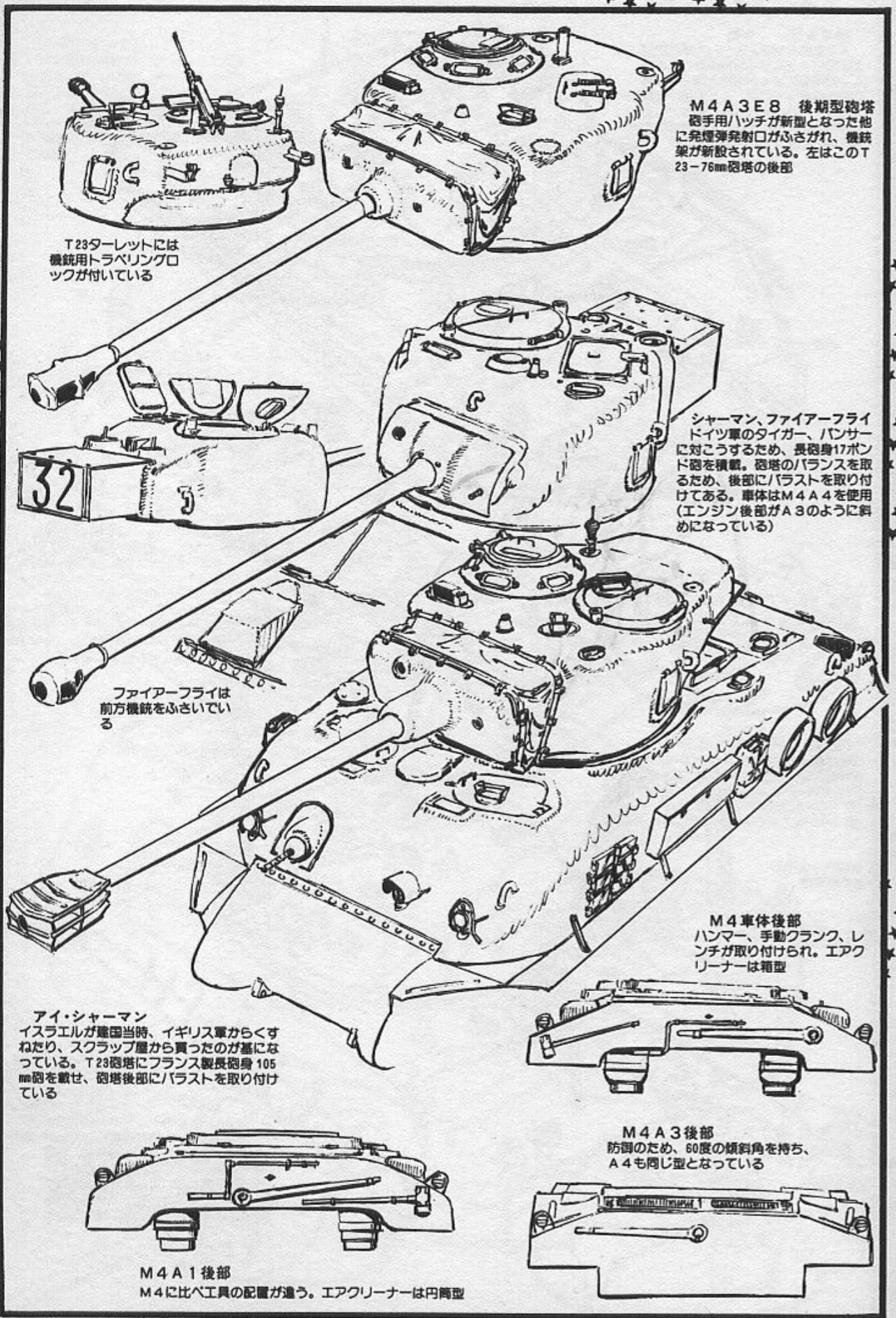




M４、M４A１中期型で使用された砲塔のバリエーションの一つ。後期型の一種で２インチ発煙弾発射器M４を装備している




M４A３　　中期
A３型はエンジンルーム上部と後部が他のM４と異なり新車体だが、M４A３初期型はM４初期型と同じ車体前方の形状をしていた。A３中期は新型コマンダーハッチが付き、前方、左右に対戦車用成形炸薬弾の防御用に土のうを積むラックが常備されている
M４A３E２
54口径76mm砲装備の砲塔。車体はA３のもの
新型コマンダーハッチ。周囲には６個のペリスコープが付き。ハッチ上部は旋回式で大型のペリスコープが付いている
新型ハッチ用の直接照準器
M４A３E８
同じ54口径76mm砲を装備したA３の発展型で砲塔はA３E８前期型。前期型で砲口にマズルブレーキの付いていない型もあるが、A３E２より足回りはHVSSに変更され、キャタピラも従来の狭軌道より広軌道になっている


M４A３E８　後期型砲塔
砲手用ハッチが新型となった他に発煙弾発射口がふさがれ、機銃架が新設されている。左はこのT23－76㎜砲塔の後部
T23ターレットには機銃用トラベリングロックが付いている
シャーマン、ファイアーフライ
ドイツ軍のタイガー、パンサーに対こうするため、長砲身17ポンド砲を積載。砲塔のバランスを取るため、後部にバラストを取り付けてある。車体はM４A４を使用（エンジン後部がA３のように斜めになっている）
32
ファイアーフライは前方機銃をふさいでいる
M４車体後部
ハンマー、手動クランク、レンチが取り付けられ。エアクリーナーは箱型
アイ・シャーマン
イスラエルが建国当時、イギリス軍からくすねたり、スクラップ屋から買ったのが基になっている。T23砲塔にフランス製長砲身105㎜砲を載せ、砲塔後部にバラストを取り付けている
M４A３後部
防御のため、60度の傾斜角を持ち、A４も同じ型となっている
M４A１後部
M４に比べ工員の配置が違う。エアクリーナーは円筒型